

研究ノート

女性と知識（1）*

森 川 甫**

1996年度大学共同研究「キリスト教史における男・女」（コンピーナー：神学部 宮谷宣史教授）において、まず第一に、私に課せられた分担は16、17世紀フランスにおける女性論の文献調査であった。この調査のために多大の教示、示唆を得ているのは、リンダ・ティンメルマンズの「新博士」学位請求論文、『女性の教養への接近（1598—1715）』¹⁾である。この著作を紹介することにより、関連する文献を一覧し、また、共同研究の課題「キリスト教史における男・女」を「女性と知識」の問題として取り組んで行きたい。

「まえがき」において、著者、リンダ・ティンメルマンズは「女性と知識」、「女性と教養」の主題が大きいことをジョルジュ・リヴェの学会における発言によって示している。『「女性と教養」この主題は大きいとジョルジュ・リヴェが数年前、〈女性と近代〉に関する学会で叫んだ。』²⁾「この問題の多様な面において、女性の知識への接近と知的な生活をとりあげよう。女性の問題に関心を持つ者にとっては、女性の教養への接近は選り抜きの領域である。」と述べて、リンダ・ティンメルマンズはマイテ・アルピスチュルとダニエル・アルモガットの次の発言に注目している。「それはアンシアン・レジーム下の大論争である。女性の全歴史における重大な要求事項である。何らかの仕方でのこの問題に遭遇しない探究はフェミニスト

の領域にはない。この問題はフランス大革命までは、とりわけ、文学を通して、特に社会のエリートに関わってきた」³⁾と。しかし、シモーヌ・ヴェーイユが主張して以来、次のことが広く認められている。「ルネッサンス期と同様、17世紀において、女性が引き続き抜きん出てきたのは特に、知的領域においてである。アンシアン・レジーム期全体を通して、自己主張を試みる女性にとって最も接近できるのは教養の面である。…しかし、教養は決してエリートの女性の独占物ではなかった。」⁴⁾

まれな例外を除いて、特に宗教の領域では、女性の教養に関する論争は、まず最初に、貴族や富裕なブルジョワ階級の女性に関わることであった。事実、彼女らはエリートに属しており、民衆の女性よりも、知的生活、文学、学問、精神的問題、神学論争に関心を持つだけの物質的な、また、教養の手段を持っていた。論争に介入する著者たちもこのエリート階級に属していた。彼等が女性一般について語っているときでさえ、富裕な女性たちを念頭においており、彼等の著作は洗練された読者を対象としていた。しかし、ジョルジュ・ギュスドルフが書いているように、「エリート階級の探究と獲得はやがて益々多くの民衆に広がって行くことによって彼等が前衛となっていることを認めることができる」⁵⁾と。

*キーワード：知識、女性、男性

**関西学院大学社会学部教授

1) Linda TIMMERMANS, *L'accès de femmes à la culture (1598-1715)*, 1993, Edition Champion, Paris. 941 p. 1991年にトゥール大学に提出し、「新博士」の学位を授与される。2) LIVET (G), "Esquisse d'une image géographique féminine", in *La Femme à l'époque moderne*, Bulletin de l'Association, n°9 (1085), p. 98.3) ALBISTUR (M.), et ARMOGATHE (D.), *Le Grief des femmes*, Hier et Demain, 1978, t. I. p. 8.4) BEAUVOIR (S. de), *Le deuxième sexe*, Gallimard, 1981, t. I, p. 122. pp. 124-125.5) GUSDORF (G.), préface à HOFFMANN (P.), *La Femmes dans la pensée des Lumières*, Ophrys, 1977, p. 13.

17世紀、女性の教養の問題を今ここで採用している研究の視点によるならば、文学史や思想史が社会的になってくる。社会的な、また、教養のある階級がイデオロギーをにじみだしているのである。「そういうわけで、できるだけ、女性の知識への接近の論争を17世紀の社会・文化のコンテキストのなかに位置づけてきた。この主題に関する議論は同時代の大論争と緊密に結び付いている。この点に関しては、特に、マルク・フュマロリ、アラン・ヴィアラ、イシエル・ド・セルトーの業績は私にとって有用であった」とティンメルマンズは述べている。

マルク・フュマロリ

FUMAROLI (Marc), “*Animus et anima : l’instance féminine dans l’apologétique de la langue française*”, *DSS*, n 144 (1984), pp. 233–240.

FUMAROLI (Marc), “*La confidente et la reine. Madame de Motteville et Anne d’Autriche*”, *RSH*, n° 115 (1964), pp. 265–278.

— “*Les enchantements de l’éloquence : Les Fées de Charles Perrault ou De la littérature*”, in *Mélanges Bénichou* (n° 740), pp. 153–186.

アラン・ヴィアラ

VIALA (Alain), *La Naissance des institutions de la vie littéraire en France au XVIIe siècle*, thèse Paris–III, 1982, III–1002 p., microfiches ANRT — *Naissance de l’écrivain. Sociologie de la littérature à l’âge classique*, Minuit, 1985, 317p. (“*Le Sens Commun*”)

ミシエル・ド・セルトー

CERTEAU (Michel de), *La Possession de Loudun* [1970], Gallimard–Julliard, 1980, 342p. (“*Archives*”)

— *L’écriture de l’Histoire*, Gallimard, 1975, 360 p. (“*Bibl. des Histoires*”)

— “*La pensée religieuse*”, in *Histoire littéraire de la France* (n° 706), t, III, 1975, pp. 149–169.

— *La Fable mystique, XVIe–XVIIe siècles* [1982], Gallimard, 1987, 414p. (“*Tel*”)

ブレモン師の『宗教感情文学史』も情報の鉱脈であり、得たものは大きかったとこれらの著書の業績とともに高く評価している。

ブレモン師

BREMOND (Henri), *Histoire littéraire du sentiment religieux en France*, 1916–1932, A. Colin, 1967–1971, 11 vol.

また、「これらの議論は、もしも今日の時代のものではない心的態度を斟酌しないならば、理解されないであろう」と指摘している。これらの問題に貢献している業績はすでにかんりのものがある。17世紀とアンシアン・レジームの女性に関する書籍、学会、論文は、文学の領域においても、歴史の領域においても今や多様である。リンダ・ティンメルマンズは次の文献を挙げている。

G. LIVET, *La Femme à l’époque moderne* ; PILLORGET (S.), “*La femme et la culture durant les temps modernes*” ; BAADER (R.), “*Die Frau im Ancien Régime*”; *id.*, “*Vom «os surnuméraire» zum «avenir de l’homme»*”, in *Das Frauenbild im literarischen Frankreich*, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, MANDROU (R.), “*Les femmes dans l’Histoire*”, *Revue Historique*, t. 242 (1969) ; DAVIS (N. Zemon), “*Women’s History*” in transition”, *Feminist Studies*, t. III n° 3–4 (1976) ; LOUGEE (C.C.), “*Review essay*”, *Signs* t. 2, n° 3 (1977); PERROT (M.), “*L’histoire des femmes en France*”, *Revue du Nord*, n° 250 (1981), “*Quinze ans d’histoire des femmes*”, *Sources*, n° 12 (1987); HUFTON (O.), “*Women in history*”, *Past & Present*, n° 101 (1983), DAUPHIN (C.) et al., “*Culture et pouvoir des femmes*”, *Annales E. S. C.*, 1986 n° 2 ; *Le genre de l’histoire*, n° spécial des *Cahiers du GRIF*, n° 37–38 (1988) ; *Femmes et pouvoirs sous l’Ancien Régime*, Marseille, Rivages, 1991.

リンダ・ティンメルマンズにとっては、次の著作も必須のものであった。17世紀の女性に関するギュスタヴ・レニエの著作、ベルナール・マニエ、ロジェ・ラツイエール、ロジェ・デュシェーヌ、マルク・アンジュノ、ヤン・マクリン、カロリン・C. ルージェ、エヴリーヌ・ベリオールサルヴァドールの諸研究がそうである。

ギュスタヴ・レニエ

REYNIER (Gustave), *La Femme au XVIIe*

siècle, ses ennemis et ses défenseurs, Tallandier, 1929, 276 p.

REYNIER (Gustave), *Les Femmes savantes de Molière. Etude et analyse*, Mellottée

ベルナール・マニエ、

MAGNÉ (Bernard), *Le Féminisme de Poullain de la Barre. Origine et signification*, thèse de 3e cycle, Toulouse, 1964.

— “Éducation des femmes et féminisme chez Poullain de la Barre (1647–1723)”, in *Le XVIIe siècle et l'éducation* (n° 678).

— “L'École des Femmes ou la conquête de la parole”, *RSH*, janv.–mars 1972.

— “Humanisme et culture féminine au XVIIe siècle d'après les *Lettres* de Mme de Sévigné”, in *Mme de Sévigné* (n° 1251), p. 37–42.

— “Présence et fonction de l'idéologie religieuse dans L'École des femmes”, *Études sur Pézénas et sa région*, t. IV, n° 3 (1973).

ロジェ・ラツイエール

LATHUILLERE (Roger), *La Préciosité. Étude historique et linguistique*, Genève, Droz, 1966.

— “La préciosité : état présent”, *Oeuvres & Critiques*, t. I, n° 1 (1978),

— “Au commencement étaient les précieuses”, in *Au bonheur des mots. Mélanges en l'honneur de Gérard Antoine*, P. U. Nancy, 1984.

— “La langue des précieux”, *TLL*, t. XXV, 1 (1987),

ロジェ・デュシェーヌ

DUCHENE (Roger), *Mme de Sévigné*, DDB, 1968.

— *Réalité vécue et art épistolaire. Mme de Sévigné et la lettre d'amour*, Bordas, 1970.

— *Madame de Sévigné ou la chance d'être femme*, Fayard, 1982.

— *L'imposture littéraire dans les Provinciales de Pascal*, Aix-en-Provence, P. U. Provence, 1984.

— *Ninon de Lenclos, la courtisane du Grand Siècle*, 1984.

— *Mme de La Fayette, la romancière aux cent bras*, Fayard, 1988.

マルク・アンジュノ、

ANGENOT (Marc), *Les Champions des femmes*,

Examen du discours sur la supériorité des femmes, 1400–1800, Montréal, P. U. Québec, 1977.

ヤン・マクリーン、

MACLEAN (Ian), “Marie de Gournay et la préhistoire du discours féminin”, in *Femmes et pouvoirs* (n 876).

エヴェリーヌ・ベリオールサルヴァドール

BERRIOT-SALVADORE (Evelyne), *Images de la femme dans la médecine du XVIe siècle et du début du XVIIe siècle*, thèse de 3e cycle, Montpellier-III, 1979.

— “Les femmes et les pratiques de l'écriture de Christine de Pisan à Marie de Gournay. «Femmes sçavantes et scavoir féminin»”, *Réforme. Humanisme. Renaissance*, n° 16 (1983).

— *La femme en France à la Renaissance. Modèles culturels et réalités sociales*, thèse Saint-Étienne, 1987.

— “Les femmes dans les cercles intellectuels de la Renaissance : de la fille prodige à la précieuse”, in *Études corses. Études littéraires. Mélanges offerts au Doyen François Pitti-Ferrandi*, Cerf-Univ. de Corse, 1989.

— “Les héritières de Louise Labé”, in *Louise Labe. Les voix du lyrisme* p. p. Guy DEMERSON, Paris-Saint-Étienne, CNRS-P. U. Saint-Étienne, 1990.

これらの諸研究を通して、女性の教養への接近に関する多くの議論が、とりわけ、世俗的教養の領域において展開されてきた。リンダ・ティンメルマンズは女性の教養への接近の問題を2つにわけている。一つは、世俗的教養に関するものであり、もう一つは、女性の宗教的教養に関するものである。

世俗的教養に関しては、多くの研究がすでになされてきたので、総合集大成の段階にきているが、リンダ・ティンメルマンズはこれを終着点としないで、出発点として捉え、大きな研究を読み返すと共に、群小作家の文書を研究し、さらに、問題を深めている。宗教的教養に関しては、リンダ・ティンメルマンズがこの研究に取りかかったときは、ほとんど処女地であった。サント・ブー

ヴの『ポール・ロワイヤル』⁶⁾以来、ジャンセニスト運動のなかでの女性を位置付けるものは殆ど書かれていなかった。⁷⁾ ティンメルマンスが埋めようとしたのは、この欠如であった。

本論に入る前に「ルネッサンス期における女性の知識への接近」⁸⁾についての、リンダ・ティンメルマンスの問題提起を概観しよう。この主題を次の3つの項目によって示している。

「1. 女性論と女性の知識への接近の問題

2. ユマニズムと宗教改革 女性の知識への接近の問題

3. 女性教育に賛同する運動、16世紀の賛成論の限界と展望」

中世期に、女性の知識への接近に関して真剣な議論があったとは思えない。男性の場合と同様、女性の大衆にはこの問題は課せられてはいなかった。読み書きが出来ないのは当然のことであった。逆に、ある種類の女性、特に、修道女や上流階級の女性には、ある種の教育は当然のことであった。(中世の教育に関する文献を脚注に挙げている。)⁹⁾ 行為や良俗を扱っている教化的著作の著者たちは、教育の問題を付随的にしかとりあげていない。女性の教養は明らかに彼等の第一の関

心事ではなかった。彼等はせいぜい娘たちが読み書きを学ばなければならないか否かを示している。13世紀には、読むことについては、フィリップ・ド・ノヴェールが『人生の四季』¹⁰⁾で述べているように、あるいは、書くことについては、ル・シュヴァリエ・ド・ラ・トゥール・ランドリが『娘の教育のための書』¹¹⁾においてしているように、女性には禁じられている。知識人、つまり、神学者、医学者、法律家、哲学者にとっては、女性の知的劣性は結婚において彼女らを服従させ、また、彼女たちを公職から排除する事を正当化する既成の事実であった。この傾向に対してルネッサンス期に入ると多くの著者が続々と異議を申し立てをして、非難している。

それ故、女性の教養への接近の問題が初めて明確に課せられたのは、ルネッサンス期である。この時代を特徴づけた諸運動、すなわち、ユマニズム(とくに、福音的ユマニズムや教育思想の潮流)と宗教改革はこの現象と無関係ではなかったし、かつまた、フランスやイタリア、あるいは、イギリスのある女性たち、つまり、女王、王妃、あるいは、貴族夫人たちの社会的、知的レベルの向上も無関係ではなかった。¹²⁾

6) Sainte-Beuve, *Port-Royal*,

7) F. E. WEAVER, "Women and religion in early modern France, *Catholic Historical Review*, t. 67, n°1 (1981), pp. 50-59.

8) L. TIMMERMANS, *op. cit.*, p. 19.

9) 中世の教育に関する文献

JOURDAIN (Ch.), *Mémoire sur l'éducation des femmes au Moyen Age*, Imprimerie Nationale, 1874; ROUSSELOT (P.), *Hist. de l'éducation des femmes*, Didier, 1883, t. I; FERRANTE (J. M.), "The education of women in the Middle Ages", in *Beyond their sex. Learned women of the European past* (1980), N. Y., U. P., 1984. GOYAU (L. F. -F.), *Christianisme et culture féminine* Perrin, 1914; *Hist. des femmes*, t. II; LUCAS (A. M.), *Women in the Middle Ages: religion, marriage and letters*, Brighton, Harvester Press, 1983; *Medieval women writers*, Athens, Georgia U. P., 1984.

10) NOVAIRE (Philippe de), *Les quatre tems d'aage d'ome*.

11) Chevalier de la Tour Landry, *Livre pour l'enseignement de ses filles*.

12) M. C. HOROWITZ, "The woman question in Renaissance texts", *History of European Ideas*, t. 8 n°4-5 (1987), KELSO (R.), *Doctrine for the Lady of the Renaissance* (1956), Urbana, Illinois U. P., 1978; LEFRANC (A.), "Le Tiers Livre et la querelle des femmes" (1905, 1931). *Rabelais*, Albin Michel, 1953; TELLE (E. V.), *L'œuvre de Marguerite d'Angouleme, reine de Navarre, et la querelle des femmes*, Toulouse, Lion, 1937. BERRIOT-SALVADORE (E.), *Images de la femme dans la médecine*, thèse de 3e cycle (dactyl.), Montpellier-III, 1979; *id.*, "Les femmes et les pratiques de l'écriture", *Réforme, Humanisme, Renaissance*, n°16 (1983), *id.*, *La Femme en France à la Renaissance*, thèse d'État, Saint-Étienne, 1987, BOUCHER (J.), *Société et mentalités autour de Henri III*, Lille, ANRT, 1981, *passim*; DAVIS (N. Z.), *Les cultures du peuple*, Aubier-Montaigne, 1979; *La Femme à la Renaissance*, n°spécial des *Acta Universitatis Lodziensis. Folia Litteraria*, n°14 (1985); GUIDI (J.), PIÉJUS (M. F.), FIORATO (A. Ch.), *Images de la femme dans la littérature italienne de la Renaissance*, Sorbonne Nouvelle, 1980; KELLY-GADOL (J.), "Did women have a Renaissance?", in *Becoming visible*, Boston, Houghton Mifflin, 1977; KING (M. L.),

1. 女性に関する論争と女性の知識への接近の問題

中世においては、この論争は主に、愛と結婚に関わっていた。女性の擁護者にしても、中傷者にしても、彼女らの知的能力とか、知的無能力とか、知識にかかわる問題ではなく、彼女らの善意と悪意を立証しつづけた。ルネッサンス期には、逆に、彼等は女性の知識への接近の問題にしばしば取り組んだ。¹³⁾ この事実はおそらく文学の新しいジャンルの出現、つまり、マルク・アンジュノ¹⁴⁾によれば、ローザンヌの法官、マルタン・ル・フランが15世紀の中葉、『貴婦人のチャンピオン』¹⁵⁾によって拓いたジャンル、女性の優位性に関する講話と関係があるに違いない。おそらく1405年に書かれ、多くの手稿本が存在しているが、ごく最近まで全く出版されていなかった（英語の翻訳を除いて）クリスチーナ・ド・ピザンの『貴婦人の都に関する書』¹⁶⁾がル・フランの書物よりも先んじていた。ところで、クリスチーナが『貴婦人の都に関する書』において明白には女性の優位性を主張していないとしても、それでも、彼女は才能（学問の高さ）において、また、徳において女性が男性に劣らないこと、また、しばしば、優れさえることを提案している。彼女の議論はいずれにしても、多くの点において、女性の優位性に関する未来のアポロジストの議論を予告している。こ

のようにして、女性一般の生来の劣性に関して、また殊にその知的弱さに関する既成の思想をくつがえし、クリスチーナ・ド・ピザン、マルタン・ル・フラン、また、その後継者たちは女性に関する論争のなかに女性の知識の問題を導入してきた。

女性優位に関する最初の立論は、中世、おそらく、13世紀に生まれた。それは、『創世記』や『新約聖書』などの記述から引き出された議論である。¹⁷⁾しかし、どの議論も女性の知識には関わっていなかった。この点、他の多くのもので同様、彼等はボッカチオの *De claris mulieribus*¹⁸⁾によって決定的な影響を受けているであろう。マルク・アンジュノはこの事実を十分に主張していない。ボッカチオは実際、彼女たちの徳、勇気、政治的能力、知識などで著名な女性のリストを用意した。女性の優位性に関する講話が多くの場合、ボッカチオによって始められたジャンル、すなわち、著名な女性たちの生活称賛、あるいは、女性礼賛の文集、と混同されるほど、女性弁護者たちは女性の優位性を樹立するために、このジャンルを用いた。女性の徳が中世において討議されたとして、逆に、戦術の、政治的、知的巧妙さは女性に関する論争のなかでは新しい主題である。それらはすべて、輝かしい未来が約束されていた。他方、それらは同じ方法で扱われたのではない。マルク・アンジュノによれば、知識への接近は15世紀から18世紀の論争文書のなかに一様に

"Thwarted ambitions: six learned women of the Italian Renaissance", *Soundings*, n° 59 (1976); *id.*, "La femme à la Renaissance", in *L'homme à la Renaissance*, Seuil, 1990. LAZARD (M.), *Images littéraires de la femme à la Renaissance*, PUF, 1985; *id.*, "Femmes, littérature, culture", in *Femmes et pouvoirs*; MACLEAN (L.), *Renaissance notion*; MATTHEWS-GRIECO (S. F.), *Mythes et iconographie de la femme dans l'estampe du XVIe s.*, thèse de 3e cycle (dactyl.), E. H. E. S. S, 1982; PELLEGRIN (N.), "L'androgynie au XVIe s.", in *Femmes et pouvoirs*; *Rewriting the Renaissance*, Chicago U. P., 1986; *Women in the Middle Ages and the Renaissance*, Syracuse U. P., 1986; *Women writers of the Renaissance and the Reformation*, Athens, Georgia U. P., 1986. Rappelons également le recueil très utile de textes L. et J. P. GUILLERM, L. HORDOIR et M. -P. PIEJUS, *Le Miroir des femmes*, P. U. Lille, 1983-1984.

13) ルネッサンス期の女性についての論争に関する文献として、以下のものを挙げている。

ASCOLI (G.), "L'Histoire des idées féministes", *Revue de Synthèse Historique*, t. XIII (1906); LEFRANC (A.), *op. cit.*; ANGENOT (M.), *Les Championnes des femmes*, 1977.; REYNIER (G.), *Le Roman sentimental avant L'Astrée* (1908); KELLY-GADOL (J.), "Early feminist thory", (1982).

14) ANGENOT (M.), *Champions des femmes*, p. 16.

15) LEFRANC (M.) *Champion*,

16) CHRISTINE DE PIZAN, *Cité des Dames*,

17) Cf. ANGENOT (M.), *Champions des femmes*, pp. 11-12.

18) Boccaccio, *De claris mulieribus*,

現われてくる「唯一の具体的主張」である。クリスチーナ・ド・ピザンの『貴婦人の都』以後、この省察は女性に関するすべての著書のなかで中心的となる。ただ反論しかできない女性の論敵に対する挑戦である。

女性の知的能力、本性と教養

女性の劣性に関する一般的な意見を覆えすことは、まず第一に、伝統的推論に反駁することを求める。古代人や教父以来、女性には理性と判断力が欠けているということが認められていた。『第三の書』のいわゆる Rondibilis、プラトンは「女性を理性的動物とするか、あるいは、野獣に分類すべきか分からなかった。¹⁹⁾『女性賛美』、『プラトンの両性に関するパンタグリユエルの注釈から引き出した着想』によれば、「官能の介在」がこの「英知と理性の重大な欠如」を引き起こしている。女性の代表者たちはこの主張を否認している。1500年に書かれ、1529年に出版され、ヨーロッパ中で大成功をおさめた『女性の高貴と卓越について』の著者のネットスハイムの哲学者、ヘンリ・コルネーユ・アグリッパによれば、「女性は男性と同じ感覚、悟性、理性、言葉が与えられている。²⁰⁾ 神は彼女らに「同じ精神力を与えた」、²¹⁾つまり、彼女らの「霊的内容は同一視される」と彼は付け加えている。この思想はしばしば採りあげられている。たとえば、リヨン出身のクロード・ド・ターユモンは『愛と貴婦人に敬意を表し、称える Champ faez に関する講話』²²⁾ において長々とそれを展開している。

『女性の名誉の攻略し難い砦』1555（貴婦人の榮譽のために構築された新たな都）において、別のリヨン生まれのフランソワ・ピヨンが、「学問と徳の能力が見い出されない彼女らの性全体の脆弱さを他人の脳の中に刻み込もうとする」²³⁾ 女嫌いを非難している。まず最初に、この「学問能

力」を証明しなければならない。多くの著者たちにとって、範例による証拠は十分ある。したがって、彼等は学識ある女性の長いリストを作成した。至るところ、同じ名前が見い出される。ボッカチオのパンテオンのなかで現われる寓話や古代の歴史の女主人公たちに、直ちに他の実例、すなわち、De claris mulieribus のなかで書き落とされている古代の学識ある女性たち、聖書やキリスト教古代の人物たちが付け加えられた。同時代人の実例ははるかに少ない。ピヨンは最も長いリストを作成している。それでも、この議論は重みがあったと思われる。女性の敵たちは彼女らの知的能力よりも学ぶことの女性にとっての有用性に異議を申し立てた。

女性の代表者の議論は必ずしも実例に限らない。幾人かの著者は理性と良識に訴えている。クリスチーナ・ド・ピザンは「娘たちを学校に通わす習慣があり、普通、息子たちにさせているように学問を学ばせるならば、彼女たちが彼等と同様、あらゆる学芸と学問の繊細を十分に学び、理解していることであろう。」²⁴⁾ と述べている。

議論は成功するであろう。娘たちを無知のなかにとどめておくのは習慣である。女性の見せかけの知的劣性は生来的に与えられているものではなく、文化的事実の結果なのである。ピヨンによれば、もしも男性の学者に問うならば、彼が女性になりたくないのは、女性が男性よりも下劣であると思っているからではなく、女性は習慣によって誘導されているため、現在あるような学問の不朽の知性を有するものとみなされないからである。もしも逆に、女性に対して（もしもそういう女性がいるとして）何故、男性になりたいかと尋ねるならば、「生来、彼女らにはその機能が奪われているので、彼女たちは見ることや知ることを生来的に望むのである」²⁵⁾ と答えるであろう。

しかし、女性優越論の擁護者たちは、本性／教養一組みに関する伝統的結論を凌駕している。教

19) RABELAIS, *Tiers Livre*, Ch. XXXII, Gallimard, 1955, p. 445.

20) H. C. AGRIPPA, *Traité de l'excellence de la femme*,

21) *Ibid.*, p. 10.

22) TAILLEMONT, *Discours des Champs faez*,

23) BILLON, *Le Fort inexpugnable*,

24) CHRISTINE DE PIZAN, *Cité des dames*,

25) BILLON, *op. cit.*, pp. 113-114.

養が奪われていても、女性は最も学識のある男性を超えている。彼女たちは天賦の学識をそなえている。雄弁は彼女たちの生来のものである。精神がより活発であるので、より天才的であり、それ故、当然、より「繊細な着想」ができるのである。彼女たちはまた予言の力を持っている。占いについても同様である。女性のいわゆる主要な力が彼女の知的内在に統合されているものとみなして、女性の称賛者は特別なある一点に基づいて、女性が一挙に本質を見抜くことを表わしている。ここでは、自然の秘密と神の計画に対する本能的認識という直感的把握である。ギヨーム・ポステルは『新世界の女性のきわめて驚くべき勝利』(1553)²⁶⁾において、「全然読んでいないのに聖なる書」をどの男性よりもよく知っている「無数の」女性を知ったと主張している。この視点は女性の敵から激しく批判されたと思われる。

ジャン・ド・マルコンヴィルは「ギリシャ語もラテン語もヘブル語も、その他の言語も、また、読書することも学ばなかったけれども、しかしながら、神的な事柄や秘密の教理に関する知識が広く、卓越している女性についてポステルが話しているのを聞いた」²⁷⁾と主張している。マルコンヴィルはこのことから、神に啓明されたのではなく、サタンに騙された「毒のある女性」のことを言っているのだと結論している。彼に語られたことの実を疑っていないことは意義深い。女性の敵にとっては、このような例は女性が悪魔的存在であるという意見を確認するためのものである。

女性が学ぶことの有用性—知識と力—

女性の知識が生来的なものであれ、獲得したものであれ、学識ある女性は悪く刺激された心を持っていると、女性の中傷者たちは主張する。それゆえ、彼らは、最悪の事態を避けるため、女性からあらゆる教育を奪うほうがよいと考えている。古いきまり文句を持ち出して、16世紀の最も

激しい女嫌いの一人、ドリユサックの領主、グラチアン・ド・ポンは、『男性と女性の論争』(1534)において、女というものは全く抑制がきかず、「誠実さ」も、「羞恥」も知らないと主張している。そして、ドリユサックは「女性が読み書きを覚えて、彼女に与える楽しみは、せいぜい、手紙を書くことくらいだ」²⁸⁾と付け加えている。

『男性と女性の論争』の著者は、中世のフィリップ・ド・ノヴェールのような議論を再び採りあげている。つまり、教育は娘たちのためには全く有用ではない。不正な愛を勇気づけるのに役立つのみであると。17世紀でも、アルノルフは相変わらず同様の推論をしている。

(この論争の論争家だけがいか見ているのではない) もう一つの危険、高慢が、知識に接近する女性たちを狙っている。アフリッパ・ドービニエは娘たちに「度はずれた精神の高揚は心をも高慢にする」と忠告している。ところで、女性にとっては、高い知性から生まれた傲慢は、彼女の使命、つまり、結婚、家事と相容れないという結果を持っている。そのことで、ドービニエは、「私は家事と貧乏への軽蔑、そんなことをあまり知らない夫への軽蔑と不和が起こるのを見た。」²⁹⁾と付け加えている。

家事への軽蔑、ポッカチオはすでに、女性はペンを執るようになると、針仕事を放り出すと言っている。夫への軽蔑、教育のある女性は結婚において彼への服従に反抗し、彼女自身が支配するようになると指摘している。³⁰⁾「自分自身が縛られることを望まない」男性に対して、イヴ・ルスポー牧師は、女学者とは結婚しないようにと忠告している。女性の中傷者はさらに辛辣である。誇張を恐れないドリユサックは学識ある女性は「彼女らの支配を失わないために、自分自身の息子を生まないようになる。憐れみも、良心の呵責もない。」³¹⁾と主張している。知識によって、女性は男性と同様、その権力、そして、それゆえ、その支配を主張できるようになる。ドリユサックのよう

26) POSTEL, *Les très merveilleuses victoires*,

27) MARCONVILLE, *De la bonté et mauvaisité*, pp. 68-69.

28) DRUSAC, *Les Controverses*, p. c (7).

29) D'AUVIGNE, *A mes filles touchant les femmes doctes*, p. 854.

30) BOCCACE, *Des Dames de renom*, 1551, p. 279.

31) DRUSAC, *op. cit.*, p. c (7).

な女嫌いにとって、女性によって握られた権力は不吉なものでしかありえなかった。

女性弁護論者もまた、女性の知識の問題を権力の用語で分析している。彼等の敵が女性の支配を怖れるのに対して、女性弁護論者は男性の支配を告発する。「あなたがたは女性を無知のなかにとどめて、彼女らにエンジンを回転させる、つまり、精神を適用させるのは、小動物のようにあなたがたの手でつなげる小さな事に関してのみである」³²⁾と、ル・フランは男たちを非難している。

17世紀において、アルノルフやイラスのような人はやはり、そのように推論するであろう。『アトレ』のどこにでもいる浮気男の女性に対する愛、どの女性でも愛する愛には、少し隠れた女嫌いを伴っている。³³⁾

他方では、16世紀の彼の多くの後継者と同様、ル・フランは男性が女性の就学を（例えば、不正に）公の仕事や国務から遠ざけるために、禁じていることをほのめかしている。コルネーユ・アグリッパはそれに男性が不正にも独占している宗教的威厳を付け加えている。ルネッサンス期の女性の代表者は、避け難い結論にまで彼等の推論を押し進めている。すなわち、女性が知識に近づくこと。同時に、公務に、それゆえ、権力に接近することを可能にしている。17世紀には、女性の弁護者は、女性の能力と彼女らの働きを区別するにせよ、彼女らの要求事項の究極の結果を予想しない、あるいは、否定するにせよ、それほど進歩していない。

ルネッサンス期には、女性の敵はくどくどと古い議論を繰り返していたが、女性の信奉者たちは、しばしば、古風でスコラスティックな見方をしていたけれども、女性の教養の領域において、近代のフェミニズムを先取りする新しい思想を持った。しかし、正確に言えば、多くの女性の弁護論が属しているジャンル、つまり、デクラマシオン（美辞麗句などをつらねた仰々しい表現）という性格を持っている。³⁴⁾ コルネーユ・アグリッ

パの論説はデクラマシオンである。シャルル・エチエンヌは『パラドックス』（1553）³⁵⁾のなかには一種の「デクラマシオン、女性のために」を挿入している。（この表現形式はアレクサンドル・ド・ポンテメリの『女性が男性よりもはるかに完成していることを忠実に証明している弁護論のパラドックス』や女性の優位性に関する論説、証言がしばしば結び付いているジャンルである）。このような題目は付いていないが、他の多くの論説はデクラマシオンとみなすことができる。たとえば、シャルル・エチエンヌの本文により、詳細な影響を受けているマリ・ド・ロミューの『女性の卓越性が男性の卓越さに勝っているとの簡単な講話』（1681）である。ところで、デクラマシオンは「現在進行中の社会的、政治的現実に対して結論の適用がありうることを考慮することなく、問題を扱うことが出来る。それが伝統的な講話や論説と異なる長所である。」また、「著者に関しては、デクラマシオンは自身の言葉で自由に意見を述べていることは認めたいとしても、十分思考されていないエッセーである。」と、ジャン・ラフォンが指摘している。³⁶⁾

クリスチーナの『貴婦人の都』、ル・フランの『貴婦人達の代表者』、サンファリアン・チャンピエの『有徳な貴婦人達の大帆船』（1503）、ピヨンの『攻略し難い砦』など多くは賛美集のジャンルにも結び付いており、そこでは、理想化と誇張法が習慣となっている。これらのどのジャンルにおいても、現在進行中の社会的、政治的現実に対して結論の適用がありうることは考慮されていない。女性優越論の他の多くの弁護論のように、『貴婦人の都』では、ジャン・ラフォンの次の指摘は全く適切である。すなわち、「擁護されている立場への著者の賛同の度合を際立たせることを可能にする特徴が混乱している。・・・読者は目印を奪われているので、極端な解決の一つを選ぶことによって曖昧さを減じている。つまり、美辞麗句集、デクラマシオンは知的遊戯であり、また、バラ

32) LE FRANC, *Champion*, f g (2) v°

33) H, d'URFE, *L'Astrée*, 1966, t. III, pp. 260-261.

34) LAFOND (J.), "Le Discours de la servitude volontaire de La Boétie et la rhétorique de la déclamation", in *Mélange... de V. L. Saulnier*, Genève; Droz, 1894, pp. 735-745.

35) Ch. ESTIENNE, *Paradoxes*, Rouen, 1638,

36) LAFOND (J.), "Rhétorique de la déclamation", p. 741, p. 744.

ドックスの秩序の名人の練習であり、あるいは、デクラマシオンは個人的立場の表明であり、それが意味しているすべての結果により文学の足元におかれるべきものである」³⁷⁾と。

しかしながら、幾人かの著者については、女性優越に関する講話は言葉の厳密な意味において「パラドックス」ではなく、ただ「与論の転覆」であることを知らなければならない。つまり、男性の女性に対する優越が何ら疑問とならない社会において、「与論に逆らって」宣言すること、理性を超えて愚者を礼賛する女性の優位性は馬鹿げており、ふざけていると思われたのであろう。シャルル・エチエンヌにとっては、いずれにしても、女性の卓越は男性の卓越よりも大きいという主張は、金持ちよりも貧乏が、美しいよりも醜いほうが、学識があるよりも無知のほうが、賢いよりも愚かなほうがよい、飲酒癖は節制よりもよいという命題と同種類のものであった。³⁸⁾最後に、女性優越に関する講話の曖昧さは全部残っている。多分、他の主題に関するデクラマシオンよりも、この主題でデクラマシオンというこのジャンルは「名人の練習」の場でありえた。(未完)

[付記]

注1) に記した如く、リンダ・ティンメルマンズ女史は *L'accès de femmes à la culture* の著者である。この書は彼女の Nouveau Doctorat (新博士) 学位請求論文を出版したものである。大小、きわめて多数の手稿本、文献を駆使した実に優れた論文であると思う。これまでその名前も知らなかった私は、この優れた研究者に会って話を伺いたいと思って、出版者 Edition Champion に仲介を依頼した。戻ってきた返事は、著者が1996年7月中旬、この世を去ったという思いがけない事実であった。出版社のデュアメル夫人にさらに調べていただき、また、畏友、パリ・ソルボンヌのフィリップ・セリエ教授(この出版社の出版図書選定委員でもある)やバーゼル大学のオリヴィエ・ミエ教授 (*Calvin et la dynamique de la parole* の著者) らの話を総合すると、次のようである。この出版シリーズのなかで最も大部の著作

(941ページ) をなしたリンダ・ティンメルマンズ女史はこれほど優れた労作を出版したにもかかわらず、正規の専任教員ではなく、グルノーブル大学の研修生として講義を担当していた。近年、博士の学位の制度は変わったが、「第三期課程博士」の学位は日本でいえば、助教授クラスのポストに就くために必要とされ、「国家博士」の学位は教授に就任するために必要とされていた。リンダ・ティンメルマンズ女史はいきなり、「国家博士」なみの大論文を書き上げたが、他の論文がないため、あるいは、フランス国籍がないため、アグレジェ(高等教育教授資格者)となれず、専任の大学教員に就けないまま、失意のうちに自らの意思でこの世を去ったと思われる。

このきわめて優秀な大論文を完成した少壮の研究者に敬意を表するとともに、哀悼の意を表したい。

37) *Ibid.*, p. 743.

38) Cf. ESTIENNE, *op. cit.*,